特定非営利活動法人（認定NPO法人）
パレスチナ子どものキャンペーン
2022年7月14日発行 no.123

サラーム

平和

昨年5月、ガザはイスラエル軍の
大規模空爆に見舞われ、10日間で
200人以上が犠牲となり、数千軒の民家が
全壊あるいは半壊の被害を受けました。
一年たったいまの思いを、
当会の現地職員たちに聞きました。

ガザ「生き延びることが私たちの夢です」

ワリードさん　誰もが1年前のことについて話すことを恐れ、「ラマダーン（断食月）」という言葉から戦争を連想するようになりました。昨年のラマダーンは空爆と重なり、私たちは生きるのに必死だったので、今年もラマダーンにはまた戦争が起こるのではないかと恐怖を感じたからです。ガザからイスラエルへロケット弾が発射されたというニュースを聞くと、子どもたちはこう尋ねます「戦争が起きるの？」。でも、私はそれに対してはっきり答えることはできず、「ゲームの音かドアが閉まる音じゃないか」などと話をはぐらかすしかないのです。飛行機や砲撃の音を聞くと彼らはこう言います。「ここは安全じゃないから、ここにはいられないよ。他の場所へ引っ越ししなきゃ」。でも、ガザの外に出ることはできません。親にできることは、ただただ子どもたちをニュースから遠ざけることだけです。

写真は、今年のガザ。瓦礫はまだ残されている。鉄筋が足りないため再利用する人たち

アハメドさん　私は第一次インティファーダが起きた1987年に生まれました。第二次インティファーダ（2000年～2004年）の時には何が起きているか分かる年齢になり、その後2008年、2012年、2014年、そして昨年5月の空爆

ホームページをリニューアルしました！

ホームページを訪れた方が必要な情報を入手しやすくしたり、参加やご寄付のハードルを下げたりすることを目指しています。ぜひご覧ください。

なお、ホームページのURL（アドレス）はこれまでと同じですが、「お気に入り登録」をされていた場合、過去の閲覧履歴が残っており、レイアウトに不具合が生じることがあります。その場合は、ブラウザー右上の・・・と縦か横に三つ並んでいるところから、「（閲覧）履歴、インターネット一時ファイル、キャッシュされた画像やファイルを削除」をしてください。
お手数をおかけしますが、よろしくお願いいたします。

https://ccp-ngo.jp/

を経験しました。昨年は今まで私が経験した中で最も規模が大きくとても怖かったです。子どもが生まれたからかもしれません。息子はまだ生後1ヶ月だったので、生まれて間もないのに24時間揺れと衝撃にさらされました。

私たちはいつでも、どこでも、攻撃を受けたり、逮捕されたり、理由を知らないまま命を落とすことがあるんです。ガザの上空にはいつも飛行機やドローンが飛んでいて、常に安全ではないという気持ちになり、生活全体に影響を及ぼしています。外出を予定しても、飛行機の音を聞いたら中止します。空爆の音かもしれないから、被害に遭ったり標的になったりするかもしれないからです。常に不安な気分です。特に夜はドローンの音がとてもうるさくて眠られず、頭がおかしくなるほどです。

ハリールさん　ロシアとウクライナの間で戦争が起きて、恐らく世界中がこの戦争について話をしているでしょう。ガザで暮らすパレスチナ人である私は、「戦争を強いられる気分はどうですか？ 理解できましたか?」とたずねたい。200万人以上が暮らすこの小さいガザは以前から戦争を経験しています。ここでは、ただ生き延びたいということだけが私たちの夢なのです。近所にミサイルが落ちてきた時、子どもたちは目を覚ましてとても怯えていました。私はあの時の気持ちを忘れられません。毎日こんな気持で生活するなんて普通ではないと思いますが、ガザの外にいる人に説明する言葉が見つかりませんし、できることが何もないため私の心はひどく傷ついています。

戦争によって破壊された生活を立て直したい。でも、まだそれはできません。なぜなら、いまだに攻撃にさらされているので何も始められないからです。先週もたくさんの地域が空爆されて頻繁に砲撃の音も聞こえました。私はガザ北部に住んでいるので、昨年と同じ状況に置かれていると感じました。私には子どもだけでなく高齢の両親がいます。私たちは「戦争」という言葉を口にする時、子どもをどうしよう、老人をどうしよう……と、抱えきれないほどたくさんのことを心配しないとならないのです。私たちは今も心理的支援が必要な状況なのです。

それでも私たちは生き続けようとしていますし、家族や子どもたちがいるので幸せになろう、彼らのためにできることは何でもやろうと常に努めています。いつか戦争の話をしなくてもいい日が来ることを願っています。そして、戦争が単なる悪い思い出になる日が来ることを。

今回、ガザの現地職員の女性たちは、「昨年のことはまだ話したくない」、「戦争について話すたびに、当時を思い出して神経質になったりイライラしたりする」と口を閉ざしました。傷は深いのです。そのうえガザでは、コロナ禍と空爆とウクライナ侵攻による食料不足で、食料品や生活物資の価格が昨年春の2倍になっていて、人々の気持ちはますます暗くなっていることが分かります。当会では、皆様のご寄付や助成などをいただき、昨年夏以来、生活に苦しむ家族へ食料や生活用品を配布したり、空爆で負傷し障がいを負った人たちへの医療支援、心理サポートを続けています。

学校に行く夢をかなえたシャムスさん

14歳のシャムスさんは、昨年5月、窓から外を見ていたところ、近所に落ちたイスラエル軍のミサイルの衝撃で、3階から外に放り出され、命はとりとめたものの大腿骨を骨折しました。手術を2回受けた後、当会の支援でリハビリを受けています。傷の回復はまだ十分でなく、腿の外側からも大きな留め具で支えられています。以前は学校に通う活発な少女でしたが、負傷し通学もできず、心も閉ざしていました。また病院で受けたリハビリが苦痛でしたが、理学療法士たちがゲーム感覚でリハビリをし、娘の回復を願う家族も協力的なため、最近は杖なしでも歩行や階段の上り下りもできるようになりました。リハビリ中に彼女は学校に行く夢を絵に描いていましたが、今年5月には学校に戻って定期試験を受けることもできました。

試験を受けるシャムスさん

自分で訓練を続けている

大腿骨を固定する金具はまだ外れていないが、通学できるようになった。